

片倉館

欧州スタイルを昭和初期の日本へ 庶民向けに建てられた温浴施設

長野県諏訪市の片倉館は、製糸業で財を成した片倉財閥の2代目兼太郎が、欧州視察旅行中に見た福利厚生施設に関心を持ったことにはじまる。昭和3（1928）年、片倉家は地元民の憩いの場となることを願って当施設を建設した。国指定重要文化財。



浴場棟の千人風呂。水深が1.1mあり立ったまま湯に浸かれる。底には玉砂利が敷き詰められ足裏に心地良い刺激がある。洗い場との仕切り壁の美しい装飾も見所。



片倉館は諏訪湖畔に位置するため、約2,600本の松の木を基礎に杭打ちし、軟弱地盤を補強して建てられた。会館棟（左）は玄関上、浴場棟（右）は屋上にステップゲートル（階段状の破風飾り）を持つ。庭が広いのは散歩を重視する欧米スタイルによるもの。



会館棟の屋根に並ぶドーマー窓。とんがり帽子を載せたような小屋根が特徴。



①女湯。広さも立ち湯のスタイルも男湯と同じ。仕切り壁に円形のステンドグラスがある。②脱衣所。中央奥が浴場への入り口。③2階の休憩室。漆喰の装飾を施した柱が並ぶ。④木製の手すりや窓が温かみを醸し出す。⑤バルコニーへ左右2方向から上れる階段。



折上格天井をしつらえた204畳の大広間。当初は結婚式にも使用されていた。木造トラスの小屋根によって広い無柱空間を実現した。窓は外観が西洋風であることから上げ下げ窓（写真右）になっている。レトロな雰囲気照明や結霜ガラスが見られる廊下。守護や魔除けの意味がある熊の彫刻。塔内の螺旋階段。窓から諏訪湖が見える。

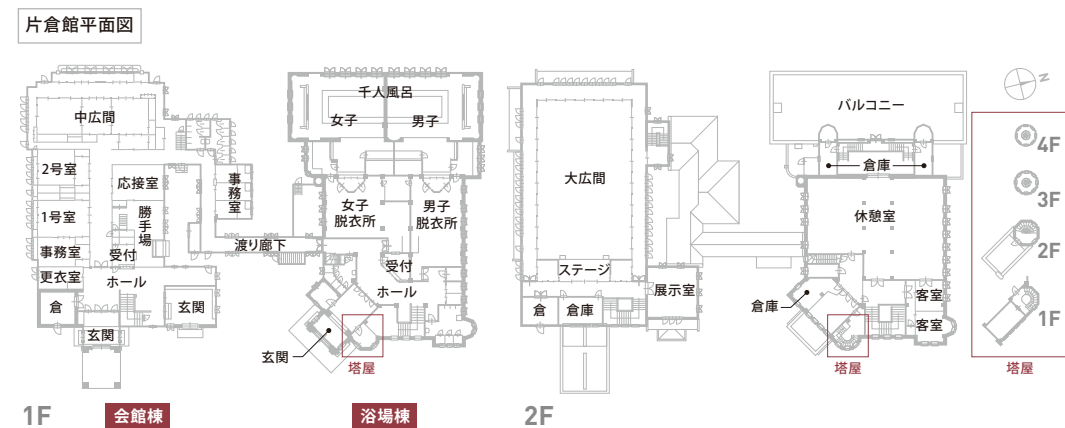
※塔内部は非公開

シルク王と呼ばれた2代目片倉兼太郎は大正11～12（1922～23）年に北中米・欧州を視察。その際に訪れたチェコスロバキアのカルルスバードは18世紀以降に発展した温泉地で、ゲートやペートーベンが入浴した温浴施設があった。1906年には施設が拡充され庶民にも利用が広がっていた。兼太郎の帰国後、創業50周年を記念して片倉家は諏訪にカルルスバード同様の福利厚生施設を建設。富裕層だけでなく庶民も気軽に入浴でき、健康づくりや社交の場として利用されることをめざした。

片倉館の浴場棟は鉄筋コンクリート造・鉄骨造で

地下1階、地上2階建（一部、3階建）。シェブロン模様を描いた急勾配の切妻屋根や、八角形の塔を持つ外観はゴシック（またはゴシックリバイバル）を思わせる。また、窓の上に見られる円形アーチや、非対称の建物構成にはロマンティックリバイバルの特徴もあり、単一の様式に収まらない独自の建築様式を特徴とする。外壁には守り神の意味を持つ熊や、歓迎を表すパイナップルをかたどった装飾も施されている。浴場には浴槽の底に丸石を敷き込んだ水深1.1mの大きな立ち湯がある。床・壁に地元産の

円形のステンドグラスをしつらえるほか、動物をかたどった彫像を配置するなど、随所に西洋風の意匠がちりばめられている。設計は森山松之助。大阪市出身で、東京帝国大学造家学科を卒業後、辰野金吾に師事して台湾総督府庁舎、久邇宮邸（現聖心女子大学パレス。国指定重要文化財）などを手掛けた。片倉館は昭和初期における西洋建築として、意匠の素晴らしさが認められている。また、実業家が私財で建設した公共の福利厚生施設であることにも歴史的な価値があり、2011（平成23）年、国の重要文化財に指定された。



用語説明

【シェブロン模様】シェブロンは軍服の腕・胸につける山形の階級章。それに似た山形紋。

【ゴシックリバイバル】ゴシック美術の装飾や建築様式の復興を試みた動き。イギリスを発祥とし18世紀後半～19世紀に行われた。

【ロマンティックリバイバル】1900年前後～1930年代にかけて、アメリカやヨーロッパで流行した建築様式。

長野県諏訪市湖岸通り4丁目1-9
協力：片倉館

